

**農学生命科学研究科**

I	教育水準	.....	教育 15-2
II	質の向上度	.....	教育 15-5

## I 教育水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 1. 教育の実施体制

#### 期待される水準にある

[判断理由]

「基本的組織の編成」については、12 の専攻を設けて、国内外からの学生を受け入れている。研究科の教員が専攻教育を担当している平成 19 年度では、教員一名当たりの学生現員数（大学院修士、博士課程）は、1.9 名である。専任教員の 17%は他大学等の出身者で、51 %は他機関での勤務経験を有する。海外の研究機関に 3 か月以上在籍した者も 59%で、国際性の高い教育を担当する体制を整えている。また、幅広い専門分野に対応するために、多数の非常勤講師を採用し、学内外の研究機関と大学院教育に関わる連携協定を結び、教育展開を図っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制」については、研究科教育会議で入試、授業カリキュラム、成績、学位審査評価等の重要事項について審議を行い、さらに、平成 19 年度には中長期的な研究科教育を検討していくための教育懇談会を設置している。また、産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構（アグリコクーン）を組織し、専攻横断的に学際教育の実施体制を強化し、さらに関係教員、事務職員に加えて大学院学生がティーチング・アシスタント（TA）として同委員会に参加し、横断的な連携協力体制を整えているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、農学生命科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育の実施体制は、農学生命科学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

### 2. 教育内容

#### 期待される水準を大きく上回る

[判断理由]

「教育課程の編成」については、当該研究科の教育研究上の目的に基づき、授業科目の構成、各課程修了に必要な講義等の単位構成を編成している。また、アグリコクーンやアグリバイオインフォマティクス人材養成プログラムを設置して、研究科としての共通基盤

を幅広く教育するための研究科共通科目を編成しているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

「学生や社会からの要請への対応」については、「魅力ある大学院教育」イニシアティブにより、アグリコクーンを設置し、専攻横断的な教員団をフォーラムグループとして組織し、独創的な研究を自ら進めることができる人材を育成する教育カリキュラムを実施している。これらの活動から発展して、食の安全研究センター、21世紀COEプログラム「生物多様性・生態系再生研究拠点」、科学技術振興調整費助成を受けてアグリバイオインフォマティクス人材養成ユニットを設置し教育に参加している。これら教育カリキュラムの教育効果について関係者へのアンケート並びに意見聴取を行い、いずれも高い評価を得ている。さらに、平成17年度から大学の知の社会還元を目的とする社会人修士課程として「木造建築コース」を設置し、国際化に対しては、外国人特別選択試験による留学生の受入れ実施や、研究科独自の基金による大学院学生の国際化支援を行っているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

特に、アグリコクーンやアグリバイオインフォマティクス人材養成プログラムを設置し、研究科としての共通基盤を広く教育するための研究科共通科目や専攻横断的な教員団の編成は画期的な取組である。アグリコクーンでは農学全体として取り組むべき重要な課題（食の安全・安心等の5課題）について、専攻横断的な教員団を中心にフォーラムグループを組織して分野横断的な独創的な研究を自ら進めるための教育カリキュラムを実施していること並びに大学の知の社会還元を目的とした社会人修士課程の設置などの複数の優れた成果を上げていることは特筆すべき状況にあるという点で「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

以上の点について、農学生命科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育内容は、農学生命科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

### 3. 教育方法

#### 期待される水準にある

##### [判断理由]

「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」については、研究倫理について、学生との直接対話などによる教育をさらに充実することが期待されるが、各専攻の教育的特徴に依存して講義・演習・実習・実験が配置され、国内外の外部機関や外部団体と積極的な連携を図りながら、各専攻で特徴ある教育プログラムの実施に様々な工夫を行っているなどの相応な取組を行っていることから、期待される水準にあると判断される。

「主体的な学習を促す取組」については、大学院入学時に科目の履修方法等について説明を行い、その科目について、詳細な大学院シラバスを配付し、学習計画の指導を行うとともに、他専攻や他研究科の講義科目の修了に必要な単位数を組み込めるように配慮し、主体的な学習を促すことに役立てている。また、リサーチ・アシスタント（RA）、TA の積極的な採用を行い、大学院学生の主体的な能力並びに教育能力の向上に努め、毎年 100 名以上の大学院生に対して海外派遣を補助し、国際性豊かな主体的学習活動の環境を整え、また、研究科長による成績優秀な学生に対する表彰制度を導入して、勉学意欲の向上を図っているなどの優れた取組を行っていることから、期待される水準を上回ると判断される。

以上の点について、農学生命科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、教育方法は、農学生命科学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

#### 4. 学業の成果

##### 期待される水準を大きく上回る

[判断理由]

「学生が身に付けた学力や資質・能力」については、2年間での大学院修士課程修了者は95%以上、獣医学博士課程を除く全専攻の博士後期課程の3年間での修了者は70%程度、獣医学博士課程の年間での学位取得者は70%以上となっている。修士論文研究や博士論文研究の学術的水準の高さは外部機関から多数の学生が表彰を受けており、また、日本学術振興会特別研究員採用率がおよそ20%であるなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「学業の成果に関する学生の評価」については、大学院修了者を対象としたアンケート調査の結果では、大学院教育に対して有益であったと回答した者は、ほぼ回答者全員に近い数値であり、大学院教育によって専門的知識及び論理的思考が習得できたと回答し、大学院教育における教育成果が修了後の進路においても活かされているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

特に、大学院博士課程修了者の12.2%が修了直後に教育・研究機関に定職を得ていることに加えて、ポスドクの約40%は3年以内に研究に従事する者として定職を得ていること、修士論文や博士論文で多数の学生が表彰されていることや日本学術振興会特別研究員採用率が高いこと、さらに大学院教育に対して専門知識と論理的思考が習得できたとほぼ回答者全員が回答しているという状況は、極めて高い水準にあり特筆すべき状況にあるという点で「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

以上の点について、農学生命科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結

果、学業の成果は、農学生命科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

## 5. 進路・就職の状況

### 期待される水準を大きく上回る

[判断理由]

「卒業（修了）後の進路の状況」については、平成19年度は修士課程修了者の約30%が大学院博士後期課程へ進学し、博士課程修了者の進路は科学研究者あるいは大学教員であり、研究科の教育目的に応えた形となっている。また、平成16年度に学位を取得した研究者の場合は、37%がポスドク開始の3年以内に更新可能なポジションを得ているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

「関係者からの評価」については、大学院教育組織の在り方並びに修了者の社会での活動状況などを含めた教育効果について、修了者の就職先企業等を含む有識者から構成される運営諮問委員から、アグリコクーン等の活動を通して積極的に対応しているという評価を得ているなどの優れた成果があることから、期待される水準を上回ると判断される。

特に、修士課程修了者の30.7%が博士課程へ進学していること、博士課程修了者の進路は、修了直後に教育・研究機関に12.2%が定職を得、さらに、ポスドクの約40%は3年以内に研究に従事する者として定職を得ているという状況は極めて高い水準にあり、特筆すべき状況にあるという点で「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

以上の点について、農学生命科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、進路・就職の状況は、農学生命科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を大きく上回る」と判断される。

## II 質の向上度

### 1. 質の向上度

#### 大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は4件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。